松任谷正隆の

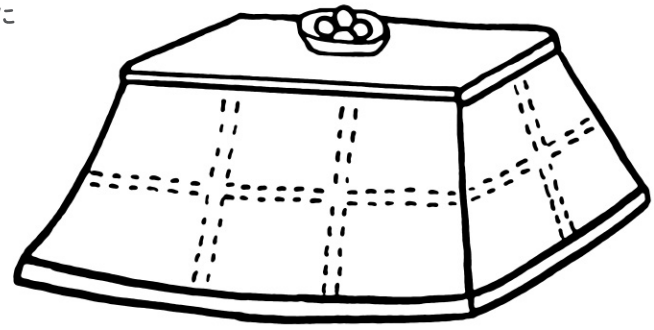
僕のひとりごと 23

VOL.23　かみさんの実家

かみさんの実家の続編である。70年代前半。
1ドルが 360 円ではなくなったあたりを想像すればいいのか。
それとも高度成長がまだまだ続いていたあたりを想像すればいいのか。
そう書いて想像出来るのはそうとうなおじいさんとおばあさんだけだろう。

かみさんの実家は呉服屋さん。お店は八王子の甲州街道沿いにあって、結構賑わっていた記憶がある。
かみさんの両親も何かと忙しそうだった。住まいの方はお店から 1キロ近く離れていただろうか。
少しだけ甲州街道を東に行って、50メートルほど入ったあたり。
前回も書いたけれど、ペンシルビルが 2つくっついたような変な建物だ。

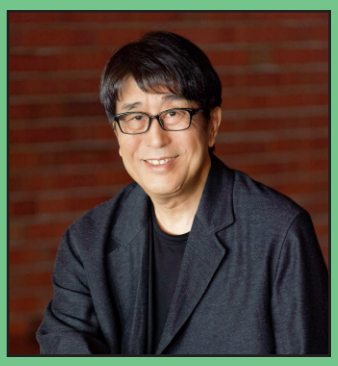
両親とも、あまりにも自分の両親とは違い、何を考えているか分からない人たちで、
ちょっと近寄りがたい感じだったけれど、
この家で長らく働いていた秀ちゃんというお手伝いさんが感じが良い人で、
なんだかいつも居間でこたつに入りながら、勧められたミカンを 3 人で食べていた記憶がある。
居間は 2 階にあり、6 畳だったか 8 畳だったか・・・もう、それは古典的な日本の居間で、
こたつの布団の柄や、ちょっとすり切れた畳、
部屋の周りに雑然と置いてある訳の分からないものたち。
ものすごい生活感を含め、自分の生まれた杉並の実家に
共通するムードが漂っていた。
さすがに現代の家にはこのような部屋は
もう少ないだろう。



山形生まれの秀ちゃんはこの部屋の主みたいな感じだった。
両親の方はと言えば、隣接している新館の方に寝室やら何やらがあるので、
旧館は秀ちゃんや子供達に明け渡している感じだったのかもしれない。この居間の奥には台所。
そして廊下の向こうにはもう一部屋、かみさんの部屋があり、階段を上がって３階に行くと、
そこには彼女のお姉さんの部屋と弟の部屋があった。

かみさんはこの連載を見ないだろうから書くけれど、彼女の部屋はちょっとシュールだった。
２階なのにやはり薄暗く、怖い人形とか、書きかけの絵とかが雑然と置いてあり、
占い師の部屋、と言っても信じてしまいそうな、そんな部屋。
クリーンとは真逆で、シンプルなものは一切なし。
どこも柄だらけ。柄とは言っても、いわゆる女の子趣味の
部屋では決してなかった。やはり占い師の部屋だ。
それまで付き合った女の子たちの部屋では感じられた
女子の匂いも一切無かった。
ひょっとしたらお香の匂いは少しあったかもしれない。
まあ、こんな部屋と生活が彼女の１枚目のアルバムを
生んだのだ、と思うと妙に納得した。
ただ僕にはあまり居心地が良くなくて、すぐに出て
隣の居間のこたつで丸くなっていた記憶がある。

暫くするとかみさんのお母さんが仕事から帰ってきて
「あーら、まんちゃん、元気？」なんていつも言われた。
そういえばお母さんのあの低い声は、
今のかみさんの声とそっくり。
うり二つだったということに最近気付いた。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。
4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。
20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、
バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。
その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。
鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。
2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。
日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。
著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy